

# KONAN UNIVERSITY

## Les Canadiens francophones et l' identité

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 典子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14990/00001717">https://doi.org/10.14990/00001717</a>

# カナダのフランス語話者とアイデンティティ

中 村 典 子

Reconnaitre les différences entre les langues, c'est affronter la tentative d'homogénéisation qui veut laminer les cultures sous prétexte d'une communication «facilitée» par une langue véhiculaire unique<sup>1</sup>.

Claude Hagège, *Contre la pensée unique*(2013)

はじめに

1. カナダのフランス語話者の現状と公用語政策
2. 唯一の二言語併用地域ニュー・ブランズウィック州の事情
3. カナダのフランス語の未来

結語にかえて

## はじめに

カナダの公用語は英語とフランス語の2言語である。これは建国に貢献したとされる英語系カナダ人、フランス語系カナダ人が多数派を占めていることに由来する。2011年の国勢調査によれば、カナダ全土において、英語を母語とする人の割合は57.8%、フランス語を母語とする人の割合は21.7%、その他の言語を母語とする人の割合が20.6%となっている<sup>2</sup>。フランス語母語話者は、カナダ東部のケベック州に多く住み、ケベック州に隣接するオンタリオ州にも居住している。オンタリオ州には、カナダで人口が最も多い都市トロント、ケベック州には人口が2番目に多い都市モントリオールがある。筆者は、1995年9月26～29日、モントリオール大学で開催された国際ジロドゥ研究会(Société Internationale des Études Giralduciennes)に参加した際、ケベック州に約1週間滞在し

1 「単一の媒介言語の使用によりコミュニケーションが《容易になる》という口実のもと、様々な文化を壊滅させようとする画一化の企てがあるが、これに対抗するには、様々な言語間の違いを認めることが重要である。」(クロード・アジェージュ『単一思考に抗して』(未邦訳) Claude Hagège, *Contre la pensée unique*, Odile Jacob Poche, 2013, p.189.

2 « Tableau 3 : Population selon les langues maternelles déclarées, Canada, 2006 et 2011 » in *Statistique Canada*, (<http://www12.statcan.gc.ca/census-recensement/2011/as-sa/98-314-x/2011001/tbl/tbl13-fra.cfm>) (最終アクセス：2015年12月10日)

たが、同年10月30日、ケベック独立住民投票が行われ、0.5%ほどの僅差で独立反対派が勝利を得たことが鮮明に記憶に残っている。当時、ケベック州とオンタリオ州以外に、フランス語母語話者が一定数居住している地域があるとは不案内であった。だが、多文化共生について研究を進めているうちに、遅まきながら、カナダ東部の大西洋岸のニュー・ブランズウィック州が、英語・フランス語の2言語を州の公用語としているカナダ唯一の州であることを知った。そして、5年毎に開かれる「アカディアン世界大会」(Congrès Acadien Mondial) が折りしもニュー・ブランズウィック州のエドモンストン(Edmundston)で開催されるという情報を得て、2014年8月中旬に「アカディアン世界大会」に出向き、アカディ(Acadie)についての学会<sup>3</sup>と行事に参加し、アカディアンたちと直接話す機会を得ることができた。

本稿では、まず、カナダのフランス語話者の現状と公用語政策について述べ、次に、カナダ唯一の二言語併用地域であるニュー・ブランズウィック州の事情について論を進め、最後に、カナダのフランス語の未来について考察したい。

## 1. カナダのフランス語話者の現状と公用語政策

カナダは、10の州(10 provinces)と3つの準州(3 territoires)からなる。2011年の国勢調査によれば、人口は約3310万人<sup>4</sup>で、10年前の2001年の約3300万人から微増している。カナダは、主として、英語系カナダ人とフランス語系カナダ人、カナダ全人口の4.3%<sup>5</sup>を占める先住民 peuples autochtones<sup>6</sup>から構成されるが、毎年、約20万人の移民(永住権取得者)を受け入れ<sup>7</sup>、多様性を体現している移民大国といっただろう。2015年10月のカナダ連邦議会の下院選挙(Élection fédérale canadienne)で10年ぶりの政権交代を実現し、首相となった自由党(Parti libéral)のジャスティン・トルドー(Justin Trudeau :

3 アカディ学会の大会報告は Noriko NAKAMURA, Compte rendu de colloque « L'Acadie dans tous ses défis : débats autour de l'Acadie en devenir », in 日本フランス語教育学会 *Revue japonaise de didactique du français*(1&2), numéro 11, 2015, pp.241-243を参照。

4 LECLERC, Jacques, « Canada : Données démographiques, Recensement 2011(par province) » in *L'aménagement linguistique dans le monde, Québec*, CEFAN, Université Laval, 1 décembre 2015, <<http://www.axl.cefan.ulaval.ca/amnord/cnddemo.htm>> (最終アクセス: 2015年12月10日)

5 « Les peuples autochtones au Canada : Premières Nations, Métis et Inuits » <<https://www12.statcan.gc.ca/nhs-enm/2011/as-sa/99-011-x/99-011-x2011001-fra.cfm#a2>> (最終アクセス: 2015年12月10日)

6 1982年発布の憲法により、3つの主な先住民民族が認定されている。ファースト・ネーションズ Premières Nations (以前は「インディアン」と呼ばれていた)、カナダで最初の先住民グループのイヌイト Inuits (以前は「エスキモー」として知られていた)、そして、カナダ入植後に現れたメティス Métis (先住民とヨーロッパ系住民の混血)である。在日カナダ大使館公式サイト <[http://www.canadainternational.gc.ca/japan-japon/about-a\\_propos/aboriginal-autochtones.aspx?lang=jpn](http://www.canadainternational.gc.ca/japan-japon/about-a_propos/aboriginal-autochtones.aspx?lang=jpn)>を参照。(最終アクセス: 2015年12月10日)

7 同上サイト <[http://www.canadainternational.gc.ca/japan-japon/about-a\\_propos/culture.aspx?lang=jpn](http://www.canadainternational.gc.ca/japan-japon/about-a_propos/culture.aspx?lang=jpn)>を参照。(最終アクセス: 2015年12月10日)

フランス語発音はジュスタン・トリュドー。後出の元首相ピエール・トルドーの長男)は、2015年11月4日、第29代内閣閣僚の宣誓就任式に続いて発表した声明の中で「カナダは、多様性があるにも拘らず強いのではなく、むしろ多様性があるからこそ強いのです」(フランス語: « Le Canada est fort, non pas malgré sa diversité, mais plutôt à cause de sa diversité <sup>8</sup>»; 英語: “Canada is strong not in spite of its diversity, but because of it <sup>9</sup>”)と述べている。トルドーは選挙前から、400万人と推定されるシリア難民に関して、自由党が政権に就けば25,000人を即座に受け入れると表明していた。しかるに、4期目を目指していた保守党のステイーヴン・ハーパー (Stephen Harper) は、4年間で10,000人のシリア難民の受け入れで十分であると公言していた<sup>10</sup>。2006年～2011年の5年間にカナダが実際に受け入れた移民の数は約116万人であるが、外国で出生してカナダに定住している人の総数は約680万人であり、カナダの人口20.6%を占める。つまり、5人に1人が外国で出生し、カナダへ移住してきた人々なのである。

カナダで最初の公用語法 (*Loi sur les langues officielles*) が制定されたのは1969年であり、フランス語系カナダ人でケベック州出身のピエール・トルドー (Pierre Trudeau) が第20代首相を務めていた時期である。ケベック州の独立に反対する立場を取るトルドー首相は、自らその原案を作成した「公用語法」において、英語とフランス語をカナダの公用語と宣言し、カナダ社会における両言語の対等性を明記した。ケベック大学モンリオール校教授のクロード・ジェルマン (Claude Germain) によれば、ピエール・トルドーが目指していたのは、アメリカ合衆国との差別化であった。「メルティング・ポット政策、つまり、すべての移民を英語という『るつぼ』に入れて同化するとの政策<sup>11</sup>」とは一線を画した政策、すなわち、カナダの建国に貢献した2つの民族の言語を2つの公用語と規定することで、言語の二元性を推進したのである。その後、ピエール・トルドー首相は、1971年、2言語の枠組みの中での多文化主義政策を発表し、これが1988年のカナダ多文化主義法 (*Loi sur le multiculturalisme canadien*) に結実することになる。そして、1988年に改定された公用語法 (*Loi sur les langues officielles*) により、2つの公用語で提供され

8 « Déclaration du premier ministre du Canada suite à l'assermentation du 29<sup>e</sup> Conseil des ministres », <http://www.pm.gc.ca/fra/nouvelles/2015/11/04/declaration-du-premier-ministre-du-canada-suite-lassermentation-du-29e-conseil> (最終アクセス: 2015年12月10日)

9 « Statement by the Prime Minister of Canada following the swearing-in of the 29th Ministry », <http://www.pm.gc.ca/eng/news/2015/11/04/statement-prime-minister-canada-following-swearing-29th-ministry> (最終アクセス: 2015年12月10日)

10 « Harper critiqué pour son refus d'accélérer l'accueil de réfugiés syriens » in *Le Devoir*, le 04 septembre 2015, <http://www.ledevoir.com/politique/canada/449356/elections-federales-trudeau-implor-harper-d-accueillir-plus-de-refugies-des-maintenant> (最終アクセス: 2015年12月10日)

11 クロード・ジェルマン, 西山教行訳「カナダの言語状況について」 in 『言語政策』9号, 2013, p.191.

〈[www.flae.h.kyoto-u.ac.jp/~nishiyama/13\\_Germain\\_Gengoseisaku9.pdf](http://www.flae.h.kyoto-u.ac.jp/~nishiyama/13_Germain_Gengoseisaku9.pdf)〉 筆者注: とはいえ、アメリカ合衆国では、英語が公用語とは規定されておらず、ルイジアナ州、メイン州、ミシシッピ州の一部ではフランス語が、メキシコに近い南西部ではスペイン語が広く使用されているため、クロード・ジェルマンの「すべての移民を英語という『るつぼ』に入れて同化するとの政策」という表現は正確ではない。

る公共サービス（交通機関、郵便、ラジオやテレビ、軍隊など）、連邦公務員が職場で使用する言語に関して詳細な規定が作られた。と同時に、公用語少数派<sup>12</sup>の人々が自分の母語で教育を受ける権利や司法に関する規定も整えられた。2014年8月、筆者がバンクーバー国際空港にて入国審査を受けた際、「フランス語を話しますか？」(Parlez-vous français?)と職員に尋ねると、フランス語で対応可能な職員がいるゲートへと案内されたこと、バンクーバー公共図書館(Vancouver Public Library)で文献を探した際、フランス語文献に詳しくフランス語を話す職員が対応してくれたことなどから確認できたが、フランス語話者が非常に少ないカナダ西端のブリティッシュ・コロンビア州(フランス語母語話者の割合は1.5%)においても、公共施設にはフランス語で対応する職員が配置されているのである。また、カナダ産の食品や製品のラベルやパッケージには、ケベック州を除いては、英語とフランス語の併記が義務づけられていることも空港の土産売り場でチェックできた。なお、ケベック州において2言語が併記されていない場合があるのは、ケベック州での公用語が「フランス語のみ」であるからにほかならない。さらに、2005年の公用語法の一部改正(Loi modifiant la Loi sur les langues officielles : promotion du français et de l'anglais)により、フランス語と英語の奨励に関する条項が強化された。とはいえ、カナダのバイリンガリズム(bilinguisme)は、連邦政府が定めた制度上の規定にほかならず、「公用語法で規定する一部の連邦公務員には英語とフランス語のバイリンガルになることを要求する<sup>13</sup>」ものの、一般のカナダ人には、2言語話者であることを推奨こそすれ、義務化もしておらず、要求もしてはいないのである。以下に、フランス語話者の割合(州別)が示されているカナダの地図、各州の公用語一覧表、フランス語母語話者の割合が多い3つの州の母語調査結果を挙げておく。

---

12 公用語少数派(minorités de langue officielle)とは、具体的には、フランス語のみを公用語とするケベック州における英語話者、ケベック州以外でのフランス語話者である。

13 矢頭典枝「カナダ公用語法(Official Languages Act)」in 日本カナダ学会(<http://jacs.jp/dictionary/dictionary-ka/09/19/535/>) (最終アクセス: 2015年12月10日)

図1 フランス語話者の割合（州別）が示されているカナダの地図<sup>14</sup>

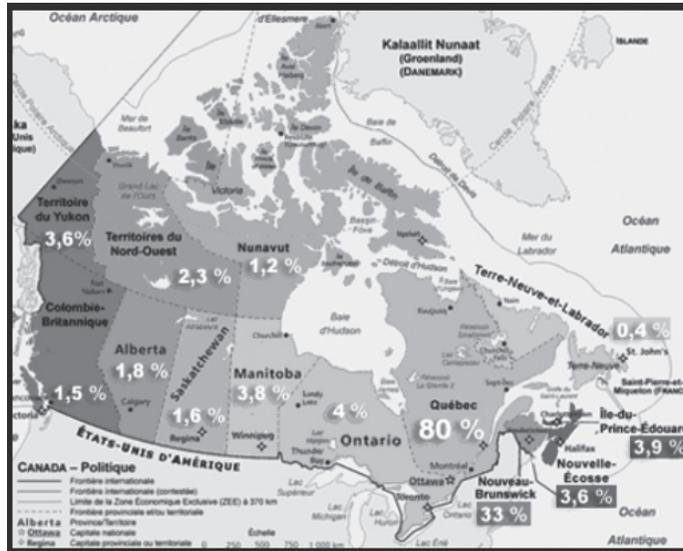


表1 カナダの公用語<sup>15</sup>

カナダ連邦政府	英語・フランス語
ブリティッシュ・コロンビア州	英語
アルバータ州	英語
サスカチュワン州	英語
マニトバ州	英語
オンタリオ州	英語
ケベック州	フランス語
ニュー・ブランズウィック州	英語・フランス語
ノバスコシア州	英語
ニューファンドランド・ラブラドール州	英語
ノースウエスト準州	英語・フランス語・クリー語などの先住民言語を併せた11言語
ユーコン準州	英語・フランス語
ヌナブト準州	英語・フランス語・イヌイット語

14 « Pourcentage de la population francophone pour chacune des provinces & territoires », La francophonie canadienne in *Parcours Canada*, (<http://parcourscanada.com/guide-canada/francophonie>) (最終アクセス：2015年12月10日) 筆者注：地図の中のフランス語話者の割合は、2006年の国勢調査の母語調査結果の数値を四捨五入したものだとして推察される。

15 LECLERC, Jacques, « Canada » in *L'aménagement linguistique dans le monde, Québec*, CEFAN, Université Laval, 1 décembre 2015, (<http://www.axl.cefan.ulaval.ca/amnord/nbrunswick.htm>) (最終アクセス：2015年12月10日) を参考に筆者が作成。

表2 フランス語母語話者の割合が多い州の母語調査結果 (2011)<sup>16</sup>

	英語		フランス語		その他の言語	
オンタリオ州	8 677 040人	68.2%	493 300人	3.8%	3 264 435人	25.6%
ケベック州	599 230人	7.6%	6 102 210人	78.0%	961 700人	12.3%
ニュー・ブランズウィック州	479 935人	64.8%	233 530人	31.5%	18 395人	2.4%
カナダ全体	18 858 980	56.9%	7 054 975	21.3%	6 567 685	19.8%

1969年の公用語法が制定された後、10州のうちでニュー・ブランズウィック州のみがカナダ連邦政府の方針を受け入れ、英語とフランス語の2言語を公用語としたのに対し、同年、ケベック州では、「フランス語推進法」(*Loi pour promouvoir la langue française au Québec*)が制定され、ケベック州内ではフランス語が優位であることが宣言された。その後、ルネ・レヴェック (René Lévesque) 率いるケベック党 (Parti québécois) 政権は、1977年、「フランス語憲章」(*Charte de la langue française*)、別名「101号法」(*la loi 101*)にてケベック州におけるフランス語の優位性を明確に規定した。これは、端的に言えば、ケベック州内の公用語をフランス語のみに限定する法律にほかならない。第1条の「フランス語がケベック州の公用語である。」(*Le français est la langue officielle du Québec.*<sup>17</sup>)に始まる214条からなる条項の重要な点のみ挙げると、行政文書の公用語のみでの作成と公表、交通標識・公共掲示板・商業用広告の公用語のみでの表示、また、例外を除き、幼稚園から中学校までの教育は基本的にフランス語で行われなければならない、社員数50人以上の企業では、公用語であるフランス語を仕事で使用する必要がある等々の規定である。ここで確認しておきたいが、カナダの公教育は、連邦政府ではなく、州政府の管轄下にある。英語が圧倒的に優勢な北米大陸にあって、約8割の住民がフランス語を母語とするケベック州では、フランス語が州の公用語であり、行政面でも商業面でも、また、教育や仕事においてもフランス語を使用するのが標準となっている。フランス語を唯一の公用語とすることがケベックの人々のアイデンティティ、フランス語ケベック文化の継承とも係わっているのは間違いないであろう。次に、英語とフランス語の2つの言語が公用語と定められているニュー・ブランズウィック州について考察を進めたい。

## 2. 唯一の二言語併用地域ニュー・ブランズウィック州の事情

2011年の国勢調査の数字によれば、ニュー・ブランズウィック州の住民は、英語母語話者が68.4%、フランス語母語話者が31.5%という構成である (表2参照)。次頁の図2から

16 *Ibid.* より筆者が作成。

17 LECLERC, Jacques, « Charte de la langue française » in *L'aménagement linguistique dans le monde, Québec*, CEFAN, Université Laval, 1 décembre 2015, <<http://www.axl.cefan.ulaval.ca/amnord/quebecchartetitre1.htm>> (最終アクセス: 2015年12月10日)

読み取れるように、フランス語母語話者は、主としてケベック州に隣接する北部から東部にかけて住んでいる。図2の左下の Maine (USA) という表示は、アメリカ合衆国のメイン州である。

図2 ニュー・ブランズウィック州の母語別居住地域<sup>18</sup>



カナダにおいて英語系住民とフランス語系住民が多数派を占めているのは、イギリスやフランスが商業と勢力圏拡大のために新大陸へと向かうようになり、その後、入植して領土略奪戦争を繰り広げた結果であるとは言ってもない。フランスがカナダを領有するための基礎を築いたのはフランスの探検家ジャック・カルティエ (Jacques Cartier) であるが、彼は、フランス国王フランソワ1世 (François I<sup>er</sup>) の命を受け、1534年にセント・ローレンス湾やセント・ローレンス河まで到達し、現在のケベック州一帯をヌーベル・フランス (La Nouvelle-France) とフランス語で呼んだ。ジャック・カルティエは北米へ探検を3回行い、ヒューロン・イロクォイ族の先住民の若者が使った言葉 «kanata» (ヒューロン・イロクォイ族の言葉で「村」や「村落」を指す単語) から、種族の酋長ドンナコナ (Donnacona) の土地周辺一帯を «Canada» という言葉で示したらしい<sup>19</sup>。これが、現在の「カナダ」という名前の由来である。

さて、ヌーベル・フランスとは、1534年の探検を端緒とする、北米大陸でのフランスの植民地の総称であるが、1763年のパリ条約 (Traité de Paris) により、ヌーベル・フランスは、イギリスとスペインに移譲されることになる。現在のケベック州の南側には、フランス人が入植した場所のひとつでアカディ (Acadie) と呼ばれた地方があったが、『地図から消えた国、アカディの記憶』と大矢タカヤスがいみじくも著書の題名<sup>20</sup>で表現したよ

18 LECLERC, Jacques, « Nouveau-Brunswick » in *L'aménagement linguistique dans le monde, Québec*, CEFAN, Université Laval, 1 décembre 2015, <<http://www.axl.cefan.ulaval.ca/amnord/nbrunswick.htm>> (最終アクセス: 2015年12月10日)

19 «Origine du nom - Canada», <<http://www.pch.gc.ca/fra/1363629314164/1363629390521>> (最終アクセス: 2015年12月10日)

20 大矢タカヤス、H・W・ロングフェロー『地図から消えた国、アカディの記憶』、書肆心水、2008。

うに、イギリス軍はアカディの攻略を目指していた。フランス軍劣勢の中、1713年のユトレヒト条約 (Traité d'Utrecht) により、アカディに定住していたフランス系住民のアカディアン (Acadiens) たちは、イギリスへの忠誠を誓うか、立ち退きかという選択を迫られた。その結果、忠誠を誓わなかったアカディアンたちは、1755年、住居を焼かれた上に所有地を没収され、「強制移住」(Déportation des Acadiens) を余儀なくされたのである。市川慎一も著書『アカディアンの過去と現在』の中で、強制移住の狙いは「北米の地図上から『アカディア』の抹殺を謀ったものと言われている」<sup>21</sup>と記している。1755年に追放されたアカディアンの数は12,500人を下らないと推測されており、彼らは、フランス本国、マサチューセッツやヴァージニア、ルイジアナを中心とするアメリカの各地へと追放された。ケベックに逃げ、1763年のパリ条約以後、アカディに戻ったアカディアンもいる。アカディにおけるフランス語系住民と英語系住民の対立の歴史は、その後何世紀にもわたり、住民たちの間に軋轢を生じさせてきたと言われている。

ニュー・ブランズウィック州のフランス語教育に関しては、大矢・奥山<sup>22</sup>が歴史的経緯を詳しく説明している。ニュー・ブランズウィック州が州として設置されたのは1784年であるが、英語系住民とフランス語系住民の対立は長く続き、ニュー・ブランズウィック州において、フランス語母語話者の子供たち向けにフランス語による公的な教育が行われるようになるまでには長い時間がかかった。カナダにおける唯一の「バイリンガル」州であるニュー・ブランズウィックにて、住民が行政上の手続きにおいて自分の選択した言語でサービスを受けることができたようになったのは1969年の「公用語法」のおかげであるが、更に2002年にニュー・ブランズウィック州で制定された「公用語法」(*Loi sur les langues officielles*) が、フランス語母語話者により多くのチャンスを与えることになった。

もっと昔に遡れば、移住を強いられ、その後、命からがら帰還したアカディアンたちには、教育について考える余裕などなく、カトリック教会の神父たちがフランス文化とカトリック信仰の基本<sup>23</sup>を教示していたようである。1932年になって、フランス語での小学校教育が行われるようになり、また、1930年代～60年代、フランス語母語話者の多い地域では、フランス語で教育を受けられる公立中学校も出現したが、教科書の多くが英語で書かれていたため<sup>24</sup>、真の意味で言語の2元性が実現するのには1964年を待たねばならなかった<sup>25</sup>。ニュー・ブランズウィック州において1969年の「公用語法」を制定したのは、1960年～1970年に州首相であったルイ・ロビショ (Louis Robichaud) であるが、熱烈なフラ

21 市川慎一『アカディアンの過去と現在－知られざるフランス語系カナダ人－』, 彩流社, 2007 p.45.

22 大矢タカヤス, 奥山令織奈「カナダ、ニューブランズウィック州におけるフランス語教育の歴史」 in 『東京学芸大学紀要 人文社会科学系』 I, 59, 2008, pp.89-103.

23 Annette Boudreau et Marie-Ève Perrot, « Quel français enseigner en milieu minoritaire ? » in *GLOTTOPOL Revue de sociolinguistique en ligne*, N° 6 - Juillet 2005, p.9.

([http://glottopol.univ-rouen.fr/telecharger/numero\\_6/gpl6\\_01boudreau.pdf](http://glottopol.univ-rouen.fr/telecharger/numero_6/gpl6_01boudreau.pdf)) (最終アクセス:2015年12月10日)

24 *Ibid.*, p.9.

25 *Ibid.*, p.10.

ンス語擁護者のアカディアン、ロビショは教育改革を重視し、ケベック州以外で唯一のフランス語系の大学であるモンクトン大学を1963年に創立した。特筆しておきたいのは、追放され、その後、帰還したアカディアンたちにとって、子供たちが母語のフランス語で教育を受ける権利を獲得することが優先事項であり、多数派を占める英語母語話者とのコミュニケーションのためのバイリンガル教育に対して不信感を持つことはあっても、自ら進んで選択する傾向はあまり見られなかった。フランス語母語話者の権利を守るこそが重要なのであった。

しかし、同州において2002年、「公用語法」を改正したアカディアンの州首相ベルナル・ロール Bernard Lord は、10年計画となる「良質の学習プラン」(*Plan d'apprentissage de qualité*<sup>26</sup>)を2003年に発表し、言語教育に関しては、英語母語話者もフランス語母語話者も、中学校卒業時に70%の生徒が、第2言語で自分の意見を的確に表現できるようにするという目標を提示している<sup>27</sup>。英語母語話者の子供を中心に、イマージョン教育等が早くから試みられたようである<sup>28</sup>し、集中授業等が充実していく中で、またグローバル化の中で、バイリンガルであることに付加価値があることをアカディアンたちも理解した。というのは、2006年の国勢調査によれば、ニュー・ブランズウィック州の住民のバイリンガル率<sup>29</sup>は、英語母語話者で14.9%、フランス語母語話者では71.0%であるからだ。図3のニュー・ブランズウィック州の地区別バイリンガル率の地図も参照されたいが、2011年の国勢調査では、主要都市のモンクトンで46.5%<sup>30</sup>、筆者がアカディ学会で訪れたエドモンストン (Edmundston) で58.3%<sup>31</sup>というバイリンガル率になっている。

---

26 « Le Plan d'apprentissage de qualité : un programme de dix ans pour le système d'éducation (03/04/23) » in *Communiqué de presse, Communications Nouveau-Brunswick* (<http://www.gnb.ca/cnb/newsf/edu/2003f0414ed.htm>) (最終アクセス：2015年12月10日) 詳細については、フランス語母語話者教員連合の次の資料を参照。(<http://www.aefnb.ca/sites/default/files/pdf/PAQ2004.pdf>) (最終アクセス：2015年12月10日)

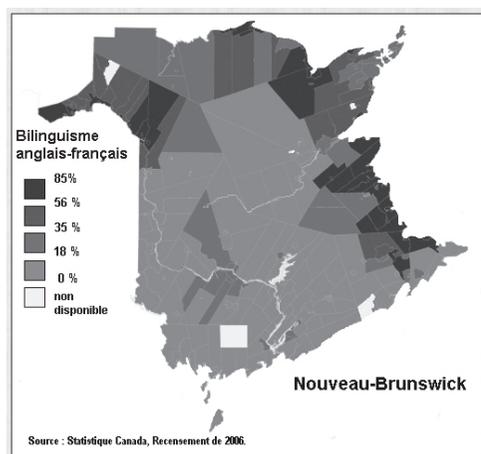
27 Claude Germain, Université du Québec à Montréal (UQAM) « L'évolution de la didactique des langues au cours du dernier quart du XX<sup>e</sup> siècle », *La Revue de l'AQEFLS* [Assoc. québécoise des enseignantes et des enseignants de français langue seconde], Vol. 25, no 2, 2005, pp. 62-72.

28 荒木陽子「共存のためのコミュニケーションを可能にする：カナダ、ニューブランズウィック州の第二言語教育（＜特集＞現代社会におけるコミュニケーションの諸相）」in 『人文社会科学研究所年報』4巻, 2006, pp.31-46.

29 LECLERC, Jacques, « Nouveau-Brunswick » in *L'aménagement linguistique dans le monde, Québec, CEFAN, Université Laval*, 1 décembre 2015, (<http://www.axl.cefan.ulaval.ca/amnord/nbrunswick.htm>) (最終アクセス：2015年12月10日)

30 « Tableau 15 Moncton - Connaissance des langues officielles, Recensement de 2011 » in *Statistique Canada*, (<https://www12.statcan.gc.ca/census-recensement/2011/as-sa/fogs-spg/Facts-cma-fra.cfm?LANG=Fra&GK=CMA&GC=305>) (最終アクセス：2015年12月10日)

31 « Tableau 15 Edmundston - Connaissance des langues officielles, Recensement de 2011 » in *Statistique Canada*, (<https://www12.statcan.gc.ca/census-recensement/2011/as-sa/fogs-spg/Facts-cma-fra.cfm?LANG=Fra&GK=CMA&GC=335>) (最終アクセス：2015年12月10日)

図3 ニュー・ブランズウィック州の地区別バイリンガル率の地図<sup>32</sup>

しかしながら、2つの問題があると筆者には感じられる。1つは、アカディで話されているアカディ特有の方言の問題であり、もう1つは、今だに続く英語系住民との対立<sup>33</sup>のために、フランス語母語話者の権利が脅かされる状況が起こっていることであるが、この点については稿を改める。

北米大陸のフランス語は主として3つに分類される。アメリカ合衆国のルイジアナのフランス語 (français louisianais)、カナダのケベックのフランス語 (français québécois)、そしてアカディのフランス語 (français acadien) であるが、特に語彙上の違いが大きいとされる<sup>34</sup>。アカディのフランス語の特徴は次のようにまとめられるだろう。1) 植物相 (flore) や動物相 (faune) や天候などの地域の自然環境を示す語、漁業や農業など実生活に関連した語に特別な語彙が多い。2) 標準的なフランス語 (français standard) と英語化 (anglicisation) の間で揺れ動いている。3) 同じアカディでもケベック州に近いニュー・ブランズウィック州北部では、ケベック方言の影響を受けるが、ケベック州から距離のあるニュー・ブランズウィック州部南東部では、古風な表現を保っていると同時に chiac というかなり英語化されたフランス語が使われている。chiac とは、Marie-Ève Perrot によ

32 LECLERC, Jacques, «Taux de bilinguisme anglais-français 2006» in *L'aménagement linguistique dans le monde, Québec*, CEFAN, Université Laval, 1 décembre 2015.

(<http://www.axl.cefan.ulaval.ca/amnord/Nbrunswick-bilinguisme-map.htm>) (最終アクセス：2015年12月10日)

33 マイノリティのフランス語母語話者に、英語母語話者と同等の権利を与えることに反対する団体の名称のみ挙げておく：Gendarmerie royale du Canada(GRC), Anglo Society of New Brunswick。2言語主義に反対していた政党 New Brunswick Confederation of Regions Party は党員数が減って2002年に解散した。

34 Jaromír Kadlec, « Le monde acadien et son reflet dans les particularités lexicales du français acadien » in Magdalena Paluszkiwicz-Misiaczek *et al.*, *Lieu et mémoire au Canada: perspectives globales*, Polska Akademia Umiejętności, 2005, p.209.

れば、「chiac, variété de français acadien en contact intensif avec l'anglais<sup>35</sup>」、[シアックとは、英語との強い関係があるアカディのフランス語の変種]である。例を挙げておく。

8) C'est juste too much (Boudreau-Perrot, 2000)<sup>36</sup>

13) As-tu ever lu le magazine Elle ? (Perrot-CRLA, 1991)<sup>37</sup>

イタリック体の箇所に英語の単語が用いられている。YouTube 上には、chiac のビデオが多くアップロードされているので、どのような発音の方言であるのかは確認していただきたいが、なかでも、*Le Chiac est la solution*<sup>38</sup>というタイトルのビデオには *Revue de la revue acadienne* という記載があり、Radio-Canada という公共放送局が制作している番組である。その中で、典型的な例として、*J'ai crossé la street.* という文が挙げられている。英語で頻繁に使われる動詞や名詞等を散りばめた俗語であるが、英語母語話者も多いニュー・ブランズウィック州の南東部では、フランス語に英語の単語を混ぜて喋っているのだろう。少し慣れれば、住民ではなくとも理解できそうである。

しかしながら、この chiac はすこぶる評判が悪い方言でもある。筆者は、「アカディアン世界大会」で chiac について発表をした若い研究者でニュー・ブランズウィック州出身の大学院生と話す機会があった。彼女は現在、トロント大学にて英語で研究を続けている。というのは、彼女がケベックの某大学で chiac の研究をしたいと志願した際、「貴方のアカディアンのフランス語で、ケベックの大学で研究を続けることには無理がある」という内容のことを教授に言われたため、バイリンガルである彼女は英語圏の大学へと志望先を変更したというのである。事実、彼女の修士論文は英語で書かれている。一例にすぎないとはいえ、フランス語母語話者は、フランスのフランス語、あるいはケベックのフランス語を標準とみなし、他の地域で話されるフランス語の多様性を容認することに消極的であり、むしろ「標準」との差別化を行ってしまう傾向が強いのではないだろうか。そのことがフランス語話者あるいはフランス語で研究を続ける者を減少させる一因になっている可能性もあると言えよう。フランス語の多様性を広く認めていくことが求められている。

35 Marie-Ève Perrot « Le trajet linguistique des emprunts dans le chiac de Moncton : quelques observations » in *Minortés linguistiques et société*, n°4, 2014, p.201. (<http://id.erudit.org/iderudit/1024698ar>) (最終アクセス：2015年12月10日)

36 *Ibid.*, p.205.

37 *Ibid.*, p.206.

38 *Le Chiac est la solution* (<https://www.youtube.com/watch?v=w36ZLQ5H2so>) (最終アクセス：2015年12月10日)

### 3. カナダのフランス語の未来

今日のグローバル化の中で、カナダのフランス語話者の数は減っていきだろうと予測する人々もいる。事実、2011年の国勢調査によれば、2006年に22.1%であったフランス語母語話者の割合は21.7%に漸減した。しかし、カナダのフランス語話者数は、少しずつながら増えていることを示しておきたい。

表3 カナダの母語話者数とその割合 (2011) <sup>39</sup>

	英語		フランス語		その他の言語		合計	
2006年	18 055 685人	57.8%	6 892 230人	22.1%	6 293 110人	20.1%	31 241 030人	100.0%
2011年	19 137 520人	57.8%	7 172 560人	21.7%	6 811 095人	20.6%	33 121 175人	100.0%

表3から、英語の母語話者の割合が全く変わっておらず、フランス語母語話者の割合が0.4%減った分、その他の言語を母語とするカナダ人の割合が少しだけ増えている。その他の言語とは、中国語が100万人と飛び抜けて多く、その後にイタリア語、ドイツ語が40万人程度と続く<sup>40</sup>。カナダ全体の人口が微増しているため、フランス語母語話者は、その割合が減っても、実人数としては30万人弱増えている。注目すべきことは、バイリンガル話者の割合が少しずつ増えていることである。英語とフランス語のバイリンガル話者であるという条件は、連邦政府のバイリンガル連邦公務員のポストを目指すことができるほか、カナダのケベック州等で仕事をする際、あるいは、ヨーロッパやアフリカのフランス語圏とのやりとりや出張の際、非常に有利に働くことは間違いないだろう。歴代のカナダの首相や政党のリーダーは、もちろん全員、英語とフランス語のバイリンガルの運用能力がある<sup>41</sup>。ジャスティン・トルドーもスティーヴン・ハーパーもケベック州のテレビ・ラジオでは、インタビューにフランス語で応対する。英語とフランス語のバイリンガル話者の総数と割合が漸増していることに注目すべきであろう。

39 « Tableau 3 Population selon les langues maternelles déclarées, Canada, 2006 et 2011 » in *Statistique Canada*, <http://www12.statcan.gc.ca/census-recensement/2011/as-sa/98-314-x/2011001/tbl/tbl3-fra.cfm> (最終アクセス：2015年12月10日) より筆者が作成。

40 LECLERC, Jacques, « Les allophones 2006 » in *L'aménagement linguistique dans le monde, Québec*, CEFAN, Université Laval, 1 décembre 2015, <http://www.axl.cefan.ulaval.ca/amnord/cnddemo.htm> (最終アクセス：2015年12月10日)

41 政党のリーダーのフランス語運用能力を判定するという記事が *The Gazette* というモントリオールの英語系主要日刊紙のサイトにある。「Parlez-vous français? The quality of party leaders' French varies greatly », <http://montrealgazette.com/news/local-news/a-look-at-the-quality-of-the-french-spoken-by-party-leaders> (最終アクセス：2015年12月10日)

図4 英語とフランス語の両方で会話できると回答したバイリンガル話者の総数と割合の推移（1971～2011）<sup>42</sup>

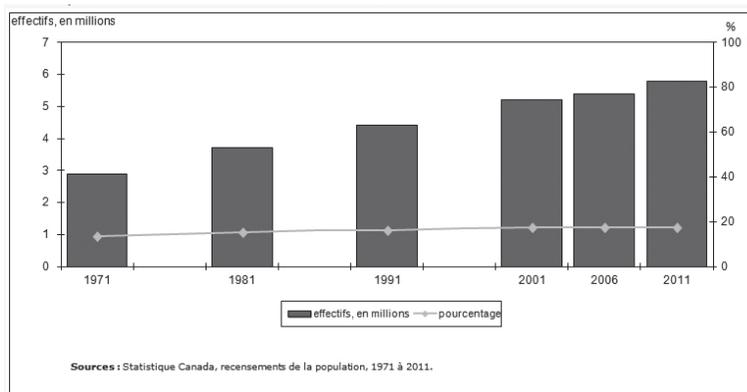


図4の中では、バイリンガル話者の総数が棒グラフで示され、バイリンガル話者の割合が折れ線グラフで示されているが、2011年の時点で、カナダには約580万人のバイリンガル話者がいて、その割合は17.5%<sup>43</sup>となった。

また、*Les Canadiens francophones*<sup>44</sup>の著者リジアンヌ・ボデュ（Lysiane Baudu）によれば、バイリンガル能力を好意的に捉える英語母語話者が57%であるのに対して、フランス語母語話者は85%がバイリンガル能力を評価している。だが、昨今、英語母語話者のカナダ人が勉強や仕事のためにフランス語を学び、バイリンガルの数が増えている傾向がある。実際、ケベック州では、1961年には25.5%にすぎなかったバイリンガル話者の割合が、2011年には42.6%<sup>45</sup>となっている。その結果、ある調査によると、ケベック州では、英語母語話者の若者10人のうち8人までがフランス語とのバイリンガル話者であると表明している<sup>46</sup>。こうして、2つの公用語を持つカナダの人々は、グローバル化の中で、英語という媒介言語のみに言語運用能力を限定するどころか、もうひとつの公用語であるフランス語の運用能力を養成している。そして、先住民の言語はもちろん、移民の言語についても配慮し、継承語教育についても各州で検討することになろう。リジアンヌ・ボデュ

42 « Nombre et proportion de Canadiens ayant déclaré pouvoir soutenir une conversation dans les deux langues officielles, Canada, 1971 à 2011 » in *Statistique Canada*,

〈<http://www12.statcan.gc.ca/census-recensement/2011/as-sa/98-314-x/2011001/fig/fig3-fra.cfm>〉

（最終アクセス：2015年12月10日）

43 « L'évolution du bilinguisme français-anglais au Canada de 1961 à 2011 » in *Statistique Canada*, 〈<http://www.statcan.gc.ca/pub/75-006-x/2013001/article/11795-fra.htm>〉（最終アクセス：2015年12月10日）

44 Lysiane Baudu, *Les Canadiens francophones*, coll. Lignes de vie d'un peuple, Editions Ateliers Henry Dougier, 2014, p.118.

45 *Ibid.*, p.117.

46 *Ibid.*, p.118.

は次のように書いている。

« Étant minoritaires, les Canadiens francophones ont sans doute davantage réfléchi à leur identité que les anglophones, majoritaires. Rejoints par d'autres francophones venus des quatre coins de la planète, ils doivent aujourd'hui se pencher de nouveau sur leur identité, mais aussi sur leurs valeurs. Il s'agit en effet d'accueillir l'altérité francophone.<sup>47</sup> »

「フランス語話者のカナダ人は少数派であるがゆえに、多数派の英語話者よりも深く自らのアイデンティティについて考えてきたに違いない。世界中からやって来るフランス語話者たちと一緒にあって、彼らは、今日、再び自らのアイデンティティと価値観について熟考しなければならないだろう。なぜなら、フランス語話者の中にある他者性を受け入れることが問題となるからである。」

言語は、その言語で表現された文化、先人たちの歴史、そして自らのアイデンティティと深く結びついている。フランス語母語話者であるケベック州のカナダ人やアカディアンが、なぜフランス語に拘るのかを思い起こさねばならない。日本語のみが共通言語という島国に生まれ育った日本人のモノリンガルな若者、モノリンガルな文化にどっぷり浸かっている若者こそ、他の言語を話す人々、他の文化を持つ人々と接し、お互いに理解し合い、戦争などに巻き込まれないようにすることが大切である。グローバル化社会の中で、母語も外国語も含めて、自分の話す複数の言語は、自分のアイデンティティの一部を構成している、ということを実感してほしい。

さて、2014年5月のカンヌ映画祭で審査員賞 (Prix du Jury) を25歳で受賞したケベック州モントリオール出身の映画監督グザヴィエ・ドラン (Xavier DOLAN : 1989年生) の『マミー』 (*Mommy* : 日本公開2015年4月) を通して、筆者が考えたカナダのフランス語の未来について2点述べておきたい。

娯楽中心のハリウッド映画とは全く異なり、ある種の社会問題を扱っている映画『マミー』が、カンヌ映画祭で審査員賞を受賞した佳作であると同時に、世界各地で興行的にも大成功を収めた良作であることについては、多くの批評家が賛美を惜しまなかった。だが、映画の中で話されているフランス語に関して数々の批判が持ち上がったのである。モントリオールのタブロイド版日刊紙 *Le Journal de Montréal* において政治学者のクリスチャン・デュフル (Christian Dufour) は «La langue de *Mommy*» と題する記事で «La langue de *Mommy*, une version très caricaturale du joul québécois, n'est pas le langage réellement parlé dans les milieux populaires…<sup>48</sup>» と書き、『マミー』で使われて

47 *Ibid.*, p.10.

48 Christian Dufour, «La langue de *Mommy*» in *Le Journal de Montréal*, le 30 septembre 2014, (<http://www.journaldemontreal.com/2014/09/30/la-langue-de-mommy>) (最終アクセス : 2015年12月10日)

いる言葉遣いが *joual* と呼ばれるケベック俗語 (*joual* : *cheval* を *joual* と発音することに由来する) を歪曲したもので、ケベック州の一般庶民の間で使われている話し言葉ではないと批判した。また、映画の専門家の元ラバル大学教授のポール・ヴァーレン (Paul Warren) はモンリオールの日刊紙 *Le Devoir* の中で « Mais il y a un “mais” ! Les « crise de tabarnak », pis les « hostie d’ciboire » qui secouent la parlure de notre dialecte québécois d’un bout à l’autre des formats carrés de Mommy (« quand y pète une frouse, tasse toé de d’là, parc’que ça joue rough ») m’inquiètent.(…) Et c’est comme ça qu’on est en train de s’acadianiser de plus belle.<sup>49</sup> » と記し、『マミー』が優れた作品であることは認めた上で、映画で使われている « crise de tabarnak » (ケベック地方で使われる罵り言葉) などのフランス語が問題で、ケベック方言を貶めるような表現に満ちていて、あたかも「優れてアカディアンのようになりつつある」と皮肉っている。こうしたケベック州での論争を踏まえ、フランスの日刊紙 *Le Monde* に「ケベック州ではグザヴィエ・ドランが言語に関する議論を再燃している」という記事を書いたマルク＝オリヴィエ・ベレール (Marc-Olivier Bherer) は次のように指摘している。

« Les cinéphiles français qui se pressent pour voir *Mommy*, le film du Québécois Xavier Dolan, sont sans doute heureux de trouver des sous-titres pour comprendre un peu le charabia employé par les personnages. Les échanges défilent à toute vitesse dans un flot ininterrompu d’anglicismes, de vulgarités et de phrases incorrectes, le tout livré dans un accent québécois à couper au couteau. Cet obstacle n’empêche pourtant pas ce film d’être l’un des plus populaires de la rentrée en France<sup>50</sup>. »

「この映画にフランス語の字幕がついていることをフランス人の映画ファンたちは喜ぶだろう」と口火を切るマルク＝オリヴィエ・ベレールは、登場人物たちが訳の分からないフランス語を喋っていると断じている。英語からの借用語、間違った表現が散りばめられた下品な言葉遣い、ケベックの強いアクセントが加わった捲くし立てるような早口のやり取りを理解するのは、フランス人にも容易ではないが、そうした障害にもかかわらず、フランスでも優れた興行成績を残しているというのだ。そして、次のように記事を結んでいる。「Et peut-être y a-t-il au fond motif de réconfort pour le Québec à voir cet accent triompher en France, là où il arrive encore parfois que l’on dénigre l’accent de la Belle

49 Paul Warren - Ex-professeur de cinéma à l’Université Laval, « *Mommy*: un grand film, oui, mais… » in *Le Devoir*, le 11 octobre 2014, <<http://www.ledevoir.com/culture/cinema/420876/mommy-un-grand-film-oui-mais>> (最終アクセス：2015年12月10日)

50 Marc-Olivier Bherer, « Au Québec, Xavier Dolan ravive le débat linguistique » in *Le Monde*, le 10 novembre 2014, <[http://www.lemonde.fr/idees/article/2014/11/10/au-quebec-xavier-dolan-ravive-le-debat-linguistique\\_4521501\\_3232.html#meter\\_toaster](http://www.lemonde.fr/idees/article/2014/11/10/au-quebec-xavier-dolan-ravive-le-debat-linguistique_4521501_3232.html#meter_toaster)> (最終アクセス：2015年12月10日)

Province. Le drame dévoile une humanité plus grande que les particularités de langage.<sup>51</sup>」 「ケベックのアクセントで喋る作品がフランスで大成功を収めるのを見るのが、ケベック州への励ましになるという動機があるのかもしれない。なぜなら、フランスでは、ケベックのアクセントが貶されることが今でもあるからだ。この作品は、言語の細かい特徴云々よりも大事な人間性を表現している」と結論づけている。芸術作品、しかも架空のカナダを想定している作品で用いられている方言を、現実のケベック方言と比較して酷評することは適切とは言えないが、言語の細かい特徴よりも、作品の主題を重視していることは評価できよう。フランスで発売されたDVDでこの作品を鑑賞した筆者は、フランス語字幕を頼りにして作品を理解したが、映画の前半で、聞き取れないケベック方言のフランス語に多少の苛立ちを覚えたのは事実である。ところが、最後まで作品を鑑賞すると、作品の中にちりばめられている罵り言葉や、ケベック方言が理解しにくいといったことは、些細なことに思われてきた。日本の映画やテレビ・ドラマの中で地方の方言を使った作品が、日本語母語話者にとっては大概気にならないのと同じ現象かもしれない（ただ、作品の中で使われている方言の細かい表現が、当該方言を熟知する人にとっては現実と違うと感じられることはあるだろう）。ことフランス語が題材とされるときには、フランスで用いられている「標準フランス語」(français standard) が規範とされることに問題があるのではないだろうか。フランスのフランス語を唯一の規範と考える人々が、ケベックのフランス語を始めとして、他のフランス語圏のフランス語を貶める傾向があることが問題ではないだろうか。

映画の中で、少年保護施設の所長が、主役の母親（ケベック州の Saint-Hubert 地区に居住）に向かってこういう場面がある。

«Madame Després, est-ce que vous parlez français, vous ?»

«Ben, je parle peut-être pas le français de France, mais … oui, je parle français.<sup>52</sup>»

「デプレさん、あなた、フランス語を話しますか」

「えーと、私は、フランスのフランス語は話さないかもしれないけれど、フランス語を話します。」

「『フランスのフランス語』のヘゲモニー（覇権）を廃したところに成立する『フランコフォニー』という概念<sup>53</sup>」について、フランスのフランス語母語話者はもちろん、ケベックのフランス語母語話者も再考すべき点があるのではないだろうか。どの地域のフランス語にも優劣をつけず、互いに理解しようと努めることが肝要であろう。英語の場合は、World Englishes という用語により、多様な地域のさまざまな英語の発音や表現を認める

51 *Ibid.*

52 グザヴィエ・ドラン監督『Mommy/ マミー』, ポニーキャニオン, 2015 (DVD), Time 04:35 - 04:40の箇所。

53 鳥羽美鈴『多様性のなかのフランス語：フランコフォニーについて考える』, 関西学院大学出版会, 2012, p.5.

方向性が示されているようだが、フランス語ではどうであろうか。今後は、「さまざまな地域で話される多様なフランス語」に関しても、大学の初修外国語のフランス語の授業で扱う必要があると筆者には思われる。そして、映画という芸術作品に内在する魅力のおかげで、少なくとも筆者はケベック方言に大いに興味を持つようになった。こうした経験を、学生たちにも伝えたい。

もう一つ、映画『マミー』との関連で、カナダのフランス語の未来を示していると思われる場面をカンヌ映画祭から紹介しておきたい。カンヌ映画祭での記者会見（Cannes 2014 - MOMMY : Conférence de presse）にて「なぜこの映画をケベック州にてケベック人の俳優たちと制作したのか」と問われて、グザヴィエ・ドランは、シナリオを書くきっかけとなったのが米国の雑誌記事であったため、最初は米国でアメリカ人の俳優たちと撮影しようと考えていたが、時間の経過の中で「映画における自分の反射神経は、自分の言語、自分の住んでいる地にあるとわかったからだ<sup>54</sup>」と説明し、「ケベック州で撮ることを選んだのは、自分がケベック人であるからだ<sup>55</sup>」と応えている。バイリンガルのグザヴィエ・ドランは、フランス語の質問にはフランス語で、英語の質問には英語で応じている<sup>56</sup>。そして、審査員賞について、ニュージーランドの映画監督ジェーン・カンピオンから英語で発表があり、ジャン・リュック＝ゴダールと同時受賞した際のグザヴィエ・ドランのスピーチは、フランス語で始まるが、途中で一部、英語に切り替わり、その後、フランス語に戻る。英語に切り替える理由を説明するに際して、次のように応えている。

«… Parce que je veux profiter de cette tribune pour m'adresser à ma génération et à Jane Campion en anglais. Le français, c'est ma langue première, c'est vrai, la plus belle langue au monde pour moi. Mais je veux que tout le monde m'entende et qu'elle m'entende.<sup>57</sup>» (c'est moi qui souligne.)

「私は、この演壇を利用して、私の世代とジェーン・カンピオンに語りかけたいのです、英語で。確かに、私の第一言語はフランス語であり、フランス語は、私にとって世界で最も美しい言語です。ただ、皆さんとジェーン・カンピオンに直接、私の話を

54 « … ma réflexe en cinéma est dans ma langue, chez moi… » (以下の YouTube のビデオで Time 31:00) (https://www.youtube.com/watch?v=CFD8NnyQX0E) (最終アクセス：2015年12月10日)

55 « Donc, j'ai choisi de le faire au Québec, parce que je suis québécois. » (同上の YouTube のビデオで Time 32:00)

56 先に挙げた Paul Warren は同記事にて、事実を歪め、次の文の後半で「カンヌの記者会見で英語で話せばいいのだ」と書いていることを付しておく。「On n'a qu'à sous-titrer le film en langue française pour les spectateurs qui parlent français… et à s'exprimer en anglais lors des conférences à Cannes.», Paul Warren, *op. cit.*

57 Cannes 2014 Prix du jury - Xavier Dolan pour *Mommy* : Grande émotion de Xavier Dolan récompensé par le Prix du Jury pour son film *Mommy*, qui a remercié la cinéaste qui lui a donné l'envie de faire du cinéma avec *La leçon de piano*. (以下のビデオで Time 02:48- 03:05) (http://www.canalplus.fr/c-cinema/c-festival-de-cannes/pid6996-ceremonies-cannes-2015.html?vid=1076433) (最終アクセス：2015年12月10日)

聞いてほしいのです。」(下線筆者)

グザヴィエ・ドランのスピーチは、多言語社会の中でのあるべき姿を示している。カンヌ映画祭の共通語がフランス語であっても、フランス語を解さないジェーン・カンピオンや聴衆には、直接、自分の英語で語りかけるという姿勢は、バイリンガル話者が持つ特権であり、相手への配慮である。こうした姿勢は、彼のアイデンティティとも深く結びついている。グザヴィエ・ドランは、フランス語を「母語」とは言わず、「第一言語」と言っていることに注目したい。モントリオールで生まれ、子供の頃から、英語からフランス語への映画の吹替をしてきたらしいが、モントリオールの郊外の学校で英語の集中授業を受けたようだ。話し相手が誰であるかにより、複数の言語を使い分けることができる能力、そして、複数の言語でインターネット上の情報を読めるような言語運用能力を学生たちが獲得できるような外国語教育を目指すため、ケベック州やニュー・ブランズウィック州の第二言語教育を詳しく研究し、言語文化教育とアイデンティティの関係について考えていきたい。

## 結語にかえて

「第一言語話者がもつ権力」について、かどや・ひでのりは、次のような問いを發している。「ある言語の第一言語話者と非・第一言語話者が言語上のコミュニケーションをとるとき、そこではどういう状況が現出するのであろうか。<sup>58</sup>」かどやによれば、コミュニケーションが不成立、あるいは十分に成立しない場合、その言語に関して「未熟な一方」である非・第一言語話者に責任が課され、非・第一言語話者は「恥の感覚」を持つことになるのに対して、第一言語話者は、その言語に関しての「ただしさ」の判断が、あたかも絶対的なものとして「神のような視点」からくだされることになり、その人の言語の水準がどのようなものであれ、客観的な説明さえ求められないことがないことを指摘している。

「講師はネイティブ」であることが、イングリッシュ語教育産業の重要な宣伝文句になったり、学校の語学教育において、当該言語の第一言語話者が重用されるのは、そのような裁定をくだす「力」をもつ「ネイティブ」の「神のような視点」が非「ネイティブ」にはもちえないものという暗黙の了解が社会的に共有されているからである<sup>59</sup>。

要するに、「非・ネイティブ」の話者が「自身は劣位にある」という感覚を持つがゆえに、対話者である「ネイティブ」には、「真理的・象徴的優位性」が「相対的に」与えら

58 かどや・ひでのり「言語権から計画言語へ」in ましこ・ひでのり編著『ことば / 権力 / 差別 - 言語権からみた情報弱者の解放』, 三元社, 2012, p.114.

59 *Ibid.*, p.116.

れることになる、という論理である。それゆえ、「コミュニケーション上のいちじるしい不平等が基本的な人権を侵害するにいたったときにおこる」「言語差別」の状況を作り出さないために、第一言語話者の存在しない言語として、「計画言語という選択」を推進し、エスペラントの普及を推進する以外の選択がないと結論づけている<sup>60</sup>。

かどやの意見は、言語を「権利」の面からのみ捉えているという意味で極端である。コミュニケーションは、何も競争や対立のみを生み出すものではないからだ。筆者がギリシャやトルコに学会出張で滞在した際は、ホテルやレストランにおいて、ジェスチャーとメモをもとに片言のギリシャ語やトルコ語を使ったが、相手はその意図を理解してくれた時の喜びは計り知れない。相手側は、旅行者が、自分の母語で挨拶したり、数字らしき単語を言っていることがわかれば、「相手が、自分の母語を使おうとしているのは、自分を尊重しているからだ」という事情が理解され、東の間の交流（コミュニケーション）が生まれる。また、第一言語話者のいないエスペラントでは、エスペラントの映画もなければ、文学も歴史もないのである。その場合、言語は本当に単なるコミュニケーションの道具になってしまう。そうではなく、ケベックやアカディの人々の歴史や状況を考察したことで、言語こそ、各個人のアイデンティティであると筆者は再認識できた。

とはいえ、今の日本においては、かどやの警告は重要である。語学教師は「ネイティブ」でありさえすればよい、外国語の授業は当該言語で行うべきであるという傾向には、全面的には賛成できない。なぜなら、言語の学習において、理解力や読解力を無視することはできないからである。グローバル化社会において、人の移動が頻繁に行われ、日本に住んでいても外国語で応対する場面が若干増えてきたのは確かである。そうした意味で、いわゆる外国語の4技能のうちの「聞く」「話す」能力を伸長させるため、当該言語を母語とする教員の役割は大きいだろう。しかしながら、インターネットの普及によって最も必要とされるようになったのは外国語を「読む」技能だといえる。また、YouTubeやDailymotion等の動画サイトの普及により、世界のニュースや大学の講義も「聞く」ことができるので、単なる会話のやりとりなどではなく、時事ニュースや専門科目に関する内容を外国語で「聞く能力」が今後は大学教育に求められるであろう。当該言語が母語の教員は、外国語学習者が、なぜ当該言語でのニュースが理解できないのか、日本人教員よりも捉えにくい点があるに違いない。というのも、当該言語を母語とする教員の「立ち位置」が、日本人学習者と全く異なるからである。「ネイティブ」でさえあれば先生は誰でもよい、「ネイティブ」の先生の授業で、当該言語の運用能力が、読解力を含めて伸びる、と本気で考えている人がどれだけいるのかは疑問である。ただ、今の学生があまりにも消極的姿勢であるため、「ネイティブ」の若い教員と、外国語で会話の練習をすれば、外国語で思考するには至らなくとも何らかのプラスにはなる、と消去法で考えている人が多いのかもしれない。自分の考えを持つ必要のない「暗記中心の教育」を中学・高校と6年

60 *Ibid.*, p.129.

間受け、マークシートに解答してきた今日の若者に、急に発言するように求めても無理であろう。今の大学入試の形態が変わることを筆者は切に願っている。そして、大学へ入ってきた若者たちが、自分の母語と外国語、自国と他国の歴史や文化を深く知ることを通して、自分のアイデンティティを確立するための手助けをするのが大学の外国語教育の役割であると筆者には感じられるようになった。金銭さえ支払えば、誰でも受けられる大手語学学校の授業を、どの大学もこぞって宣伝文句として受験生とその親にアピールするようなことは、日本以外では考えられない現象ではないだろうか。こうした現象がずっと続くのか、あるいは、一定期間が経てば終わるのか、静観していきたい。

以上、カナダのフランス語話者をテーマとして、言語とアイデンティティについて考察してきた。今後は、カナダのフランス語圏の言語教育の詳細を研究し、日本でどのように応用できるかを考えていきたい。

---

※本研究は、科研費基礎研究（B）25284103の助成を受けたものである。

## ＜主要参考文献＞

- 荒木陽子「共存のためのコミュニケーションを可能にする：カナダ、ニューブランズウィック州の第二言語教育（＜特集＞現代社会におけるコミュニケーションの諸相）in『人文社会科学研究所年報』4巻, 2006.
- 市川慎一『アカディアンの過去と現在 - 知られざるフランス語系カナダ人-』, 彩流社, 2007.
- 大矢タカヤス、H・W・ロングフェロー『地図から消えた国、アカディアの記憶』, 書肆心水, 2008.
- 大矢タカヤス、奥山令織奈「カナダ、ニューブランズウィック州におけるフランス語教育の歴史」in『東京芸芸大学紀要 人文社会科学系』I, 59, 2008.
- かどや・ひでのり「言語権から計画言語へ」in ましこ・ひでのり編著『ことば／権力／差別 - 言語権からみた情報弱者の解放』, 三元社, 2012.
- クロード・ジェルマン、西山教行訳「カナダの言語状況について」in『言語政策』9号, 2013.
- 鳥羽美鈴『多様性のなかのフランス語：フランコフォニーについて考える』, 関西学院大学出版会, 2012.
- 矢頭典枝「カナダ公用語法（Official Languages Act）」in 日本カナダ学会 〈<http://jacs.jp/dictionary/dictionary-ka/09/19/535/>〉
- 矢頭典枝『カナダの公用語政策 - バイリンガル連邦公務員の言語選択を中心として-』, リーベル出版, 2008.
- Baudu, Lysiane, *Les Canadiens francophones*, coll. Lignes de vie d'un peuple, Editions Ateliers Henry Dougier, 2014.
- Boudreau, Annette et Perrot, Marie-Ève, « Quel français enseigner en milieu minoritaire ? » in *GLOTTOPOL Revue de sociolinguistique en ligne*, N° 6 - Juillet 2005, p.9.
- Hagège, Claude, *Contre la pensée unique*, Odile Jacob Poche, 2013.
- Germain, Claude, Université du Québec à Montréal (UQAM) « L'évolution de la didactique des langues au cours du dernier quart du XXe siècle », *La Revue de l'AQEFLS* [Assoc. québécoise des enseignantes et des enseignants de français langue seconde], Vol. 25, no 2, 2005, pp. 62-72.
- Kadlec, Jaromír, « Le monde acadien et son reflet dans les particularités lexicales du français acadien » in Magdalena Paluszkiwicz-Misiaczek et al., *Lieu et mémoire au Canada: perspectives globales*, Polska Akademia Umiejętności, 2005.

- Leclerc, Jacques, « Canada : Données démolinguistiques, Recensement 2011 (par province) » in *L'aménagement linguistique dans le monde, Québec*, CEFAN, Université Laval, 1 décembre 2015, <[http:// www.axl.cefan.ulaval.ca/amnord/cnddemo.htm](http://www.axl.cefan.ulaval.ca/amnord/cnddemo.htm)>
- Nakamura, Noriko, Compte rendu de colloque « L'Acadie dans tous ses défis : débats autour de l'Acadie en devenir », in 日本フランス語教育学会 *Revue japonaise de didactique du français* (1&2), numéro 11, 2015, pp.241-243.
- Perrot, Marie-Ève, « Le trajet linguistique des emprunts dans le chiac de Moncton : quelques observations » in *Minortés linguistiques et société*, n° 4, 2014, pp.200-218.

グザヴィエ・ドラン監督『Mommy/ マミー』, ポニーキャニオン, 2015 (DVD)

Xavier Dolan, *Mommy*, Diaphana, 2015 (DVD)

<使用した主なサイト>

カナダ大使館公式サイト <[http://www.canadainternational.gc.ca/japan-japon/about-a\\_propos/aboriginal-autochtones.aspx?lang=jpn](http://www.canadainternational.gc.ca/japan-japon/about-a_propos/aboriginal-autochtones.aspx?lang=jpn)>

Statistique Canada

<<http://www.statcan.gc.ca/start-debut-fra.html>>

Cabinet du Premier Ministre

<<http://www.pm.gc.ca/fra/nouvelles/2015/11/04/declaration-du-premier-ministre-du-canada-suite-lassermentation-du-29e-conseil>>

<<http://www.pm.gc.ca/eng/news/2015/11/04/statement-prime-minister-canada-following-swearing-29th-ministry>>

Le Devoir

<<http://www.ledevoir.com/politique/canada/449356/elections-federales-trudeau-implore-harper-d-accueillir-plus-de-refugies-des-maintenant>>

Parcours Canada

<<http://parcourscanada.com/guide-canada/francophonie>>

Gouvernement du Nouveau-Brunswick

<<http://www.gnb.ca/cnb/newsf/edu/2003f0414ed.htm>>

Association des enseignantes et des enseignants francophones du Nouveau-Brunswick

<<http://www.aefnb.ca/sites/default/files/pdf/PAQ2004.pdf>>

The Gazette

<<http://montrealgazette.com/news/local-news/a-look-at-the-quality-of-the-french-spoken-by-party-leaders>>

YouTube

<<https://www.youtube.com/watch?v=w36ZLQ5H2so>>

<<https://www.youtube.com/watch?v=CFD8NnyQX0E>>

<<http://www.canalplus.fr/c-cinema/c-festival-de-cannes/pid6996-ceremonies-cannes-2015.html?vid=1076433>>

〈キーワード〉 カナダのフランス語話者 / 公用語 / アカディ / ケベック  
〈Mots-clefs〉 Canadiens francophones / Langue officielle / Acadie / Québec

〈résumé〉

## Les Canadiens francophones et l'identité

Noriko NAKAMURA

Au Canada, dont la population actuelle anglophone est de 57 % et la population francophone de 22 %, le gouvernement fédéral dirigé par Pierre Trudeau adopta, en 1969, la *Loi sur les langues officielles*, et désigna deux langues comme officielles : le français et l'anglais. La grande innovation de ladite loi résidait dans le fait qu'elle instaurait le bilinguisme officiel au niveau du gouvernement fédéral du Canada. Ainsi, le bilinguisme canadien est constitué par l'ensemble des législations et politiques qui mettent en œuvre le statut égal du français et de l'anglais au niveau national et protègent les droits des minorités francophones ou anglophones dans les différentes provinces. Cependant, d'une province à l'autre il existe une politique linguistique différente. Dans la plupart des provinces dont les citoyens sont en majorité anglophones, est toujours pratiqué l'unilinguisme de l'anglais. Or la province du Nouveau-Brunswick, à la suite cette loi de 1969, devint la seule province officiellement bilingue. En effet, le Nouveau-Brunswick comptait à l'époque près de 30% de francophones, descendants des Acadiens expulsés en 1755 par les Anglais pendant la Guerre de la Conquête. D'autre part, le gouvernement du Québec adopta en 1977, soit un an après l'arrivée au pouvoir du Parti québécois sous la direction de René Lévesque, la *Charte de la langue française*, souvent plus connue sous son nom officieux de *loi 101*. Avec cette loi, le Québec, comptant près de 80% de francophones contre 15% d'anglophones, devint la seule province fixant le français comme unique langue officielle : l'unilinguisme du français est maintenu, non seulement dans les textes et documents publiés par le gouvernement, mais aussi dans la signalisation routière et dans l'éducation des enfants jusqu'au collège. Ainsi, les Canadiens francophones persistent dans leurs efforts pour préserver, de droit comme de fait, leur langue, leur culture et l'histoire de leurs ancêtres. Qui plus est, d'après Lysiane Baudu, auteure du livre intitulé *Les Canadiens francophones*, les francophones sont plus favorables au bilinguisme (85%) que ne le sont les anglophones

(57%). Dans cet article, après avoir parcouru rapidement la situation actuelle et l'histoire de la politique linguistique au Québec et au Nouveau-Brunswick, nous réfléchissons sur l'importance des politiques linguistiques du point de vue de l'identité de chaque citoyen à travers le film québécois *Mommy* - dû à un très jeune réalisateur montréalais : Xavier Dolan, qui a remporté au festival de Cannes 2014 le Prix du jury - pour enrichir nos considérations sur la langue française.

